

『徒然草』における『源氏物語』の世界

— 第四十四段を中心に —

金 文峰

はじめに

『徒然草』には、王朝物語の一齣を想起させるような章段がいくつかあるが、その中でも『源氏物語』を踏まえて書き付けたと思しき記事が少なくないということは先学の様々な論文で指摘されている。兼好が『源氏物語』を熟読していたことは、古典的な和歌や歌謡への讃嘆を語っている第十四段や四季の風物についての随想を述べている第十九段の記事の中に『源氏物語』の書名が出てくることから明らかである。

貫之が、「糸による物ならなく」といへるは、古今集の中の歌の屑とかや言ひ伝へたれど、今の世の人の詠みぬべきことがらとは見えず。(中略) 源氏の物語には、「物とはなしに」とぞ書ける。(第十四段)

言ひ続くれば、皆源氏の物語、枕草子などにこと古りにたれど、同じことは今さらに言はじともあらず。(第十九段)

また、第九十八段に「揚名介に限らず、揚名目といふ物もあり。

政事要略にあり」と、『源氏物語』中の難義として名高い「揚名介」をめぐる考証を記していることから『源氏』への関心がよく窺われる。そして『源氏物語』の風景を思わせるような記事が第三十一段、三十二段、四十三段、四十四段、百四段、百五段、二百三十五段、二百三十九段等に見られることから考えても、『徒然草』を執筆する時、兼好が『源氏物語』を座右に置いていた可能性は高いであろうと思われる。

その中でも、王朝的な雰囲気の色濃く湛えた百四段と百五段、四十三段と四十四段、三十二段の諸段については、従前からそれが兼好自身の体験に基づくものであるか、それとも架空譚であるかということで議論があつたが、稲田利徳氏は「徒然草の虚構性」と題する論文において、これらの諸段を取り上げ、先行作品や『徒然草』の内部の理念との関連を検討した上で、これらの章段は「全くの空想の産物でなく、体験を核とした虚構化による創造とみる」と述べられている。

ここでは、氏の論文でも取り上げている第四十四段を中心に、直

前の四十三段をも視野に入れながら、そこに現われている『源氏物語』の投影を違った角度から考察してみたいと思う。

一

『徒然草』第四十三段は、暮春、趣ある家で若く美しい男が読書する有様を垣間見るという内容である。つづく四十四段は、秋の夜、笛を吹きながら田中を行く男のあとに随い、趣ある山荘に入つてその内部の様子を叙述するという展開を示す。

- ①春の暮つかた、②のどかに艶なる空に、いやしからぬ家の、
- ③奥深く、木立古りて、④庭に散しほれたる花、見過ぐしがたきを、入て見れば、⑤南面の格子みな下してさびしげなるに、
- ⑥東に向きて妻戸のよきほどに開きたるが、御簾の破れより見れば、かたち「き」よげなる男の、年廿ばかりにて、うちとけたれど、心にく、のどやかなるさまして、机に文をくりひろげて見たり。いかなる人なりけん、尋ね聞かまほし。^②

(四十三段)

あやしの⑦竹の編戸の内より、いと若き男の、月の影に色あひ定かならねど、つや、かなる狩衣に濃き指貫、いとゆへづきたるさまにて、⑧さ、やかなる童ひとりを具して、遙かなる田の中の細道を、稲葉の露にそぼちつ、分け行ほど、笛をえならず吹すきみたる、あはれと聞き知るべき人もあらじと思ふに、行かん方知らまほしく、見送りつ、行けば、笛を吹やみて、山の

際に惣門ある内に入ぬ。榻に立てたる車の見ゆるも、宮こよりは目とまる心ちして、下人に問へば、「しかくの宮のおはします頃にて、御仏事などのさふらふにや」と言ふ。御堂の方には法師どもまいたり。⑨夜寒の風に誘はれ来る空だき物の匂ひも、身にしむ心ちす。⑩寝殿より御堂の廊に通ふ女房の追風用意など、人目なき山里ともいはず、心づかひしたり。⑪心のま、に茂れる秋の野らは、⑫をきあまる露に埋もれて、虫の音かこどがましく、遣水の音のどやか也。宮この空よりは雲の行来も速き心ちして、月の晴れ曇るほど定めがたし。(四十四段)

右の両段と『源氏物語』『紫式部日記』の文章との関わりについては、久保田淳氏『徒然草評釈』^③や稲田利徳氏の前掲論文で詳論されている。これらの論文や注釈の指摘を踏まえながら、第四十三段、四十四段の叙述の中で『源氏物語』『紫式部日記』の文章との関連が認められると判断される事例について次の表を作成した。

| | | |
|-----------------------|--|-----------------|
| 徒然草 ^a | 源氏物語・紫式部日記 ^c | 指摘 ^d |
| ①春の暮つかた ④庭に散しほれたる花 | (若紫) 三月のつごもりなれば、京の花、盛りはみな過ぎにけり。 | 筆者 |
| ②のどかに艶なる空 | (帚木) 空の気色も(中略)艶にも凄くも (藤袴) 空の気色も艶なるに | 田辺 田辺・久保田 |

| | | |
|---|---|------------------------------------|
| | <p>(螢) 夕闇過ぎて、おぼつかなき空の気色の曇らはしきに、うちしめりたる宮の御けはひも、いと艶なり (紫式部日記) おほかたの空も艶なるにもてはやされて</p> | 久保田 |
| <p>③奥深く、木立古りて ⑩(前略) 人目なき山里ともいはず ⑪心のまゝに茂れる秋の野ら</p> | <p>(若紫) 荒れたる家の、木立いとものふりて (〃) いとすこげに荒れたる所の、人少ななるに (〃) 年ごろよりもこよなう荒れまさり、広うもの古りたる所の、いと人少なにさびしければ (夕顔) いといたく荒れて、人目もなくはるばると見たたされて、木立いと疎ましくもの古りたり。け近き草木などはことに見どころなく、みな秋の野にて</p> | <p>筆者 筆者 筆者 三木・久保田</p> |
| <p>⑤南面の格子みな下して</p> | <p>(紫式部日記) まだ夜ふかきほどの月さしくもり、木の下をぐらきに、「御格子まいりなばや」「女官はいままでさぶらはじ」「藏人まいれ」などいひしろふ程に (紫式部日記)「格子のもと取りさげよ」とせめ給へど、いとくだりて上達部のゐたまはんも、かゝる所といひながらかたははらいたし (若紫) 御格子まゐりぬ。もの恐ろしき夜のさまなめるを、宿直人にて</p> | <p>久保田 同上 同上</p> |

| | | |
|---------------------------------------|---|------------------------|
| | <p>はべらむ (未摘花) からうじて明けぬる気色なれば、格子手づから上げたまひて、前の前栽の雪を見たまふ</p> | 同上 |
| <p>⑥東に向きて妻戸のよきほどに開きたるが、御簾の破れより見れば</p> | <p>(野分) 中将の君、まゐり給ひて、ひんがしの渡殿の小障子の上より、妻戸のあきたる隙を、なに、心もなく、見入れ給へるに (浮舟) やをらのぼりて、格子の隙あるを見つけて、より給ふに、伊予簾は(中略)新しう、清げに造りたれど、さすがに荒くしくて隙ありけるを</p> | <p>稲田 稲田</p> |
| <p>⑦竹の編戸</p> | <p>(須磨) 竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものからめづらかにをかし。</p> | <p>稲田・久保田</p> |
| <p>⑧さ、やかなる</p> | <p>(帚木) ただ独りいとささやかなて臥したり。</p> | <p>近世の諸注・久保田</p> |
| <p>⑨夜寒の風に誘はれ来る空だき物の匂ひも、身にしむ心ちす。</p> | <p>(若紫) げに、いと心ことによしありて同じ木草をも植ゑなしたまへり。月もなきころなれば、遣水に篝火ともし、灯籠などにもまゐりたり。南面いときよげにしつらひたまへり。そらだきもの心にくくかをり出で、名香の香など匂ひ満ちたるに、君の御追風いとことなれば、内の人々も心づかひすべかめり。</p> | <p>句解・佐野・三木・田辺・久保田</p> |
| <p>⑩寝殿より御堂の廊に通ふ女房の追風用意など、人目</p> | | |

| | | |
|---|--|--|
| <p>なき山里とも いはず、心づ かひしたり。 ①心のまゝに 茂れる秋の野 ら ②をきあまる 露に埋もれて、 虫の音かごと がましく、遣水 の音のどやか 也。</p> | <p>(東屋) うち払ひたまへる追風、い とかたはなるまで東國の里人も驚き ぬべし。 (幻) つれづれとわが泣きくらす夏 の日をかごとがましき虫の声かな</p> | <p>寿抄・野 槌・慰草・ 拾遺抄・三 木 寿抄・野 槌・慰草・ 拾遺抄・諸 抄大成・田 辺・三木・ 久保田・稻 田</p> |
|---|--|--|

注

- (a) 表に付してある番号は、直前に掲げている『徒然草』四十三段、四十四段の文章の中に付してある番号と符合する。
- (b) 『源氏物語』の本文の引用は、新編日本古典文学全集本(小学館)に拠った。
- (c) 『紫式部日記』の本文の引用は、新日本古典文学大系本(岩波書店)に拠った。

- (d) 『徒然草』の注釈書類の略語については、以下のごとくである。
 - ・ 寿抄 — 秦宗巴『つれづれ／＼草寿命院抄』。
 - ・ 野槌 — 林羅山『野槌』。
 - ・ 慰草 — 松永貞徳『慰草』。以上の三書は、いずれも吉沢貞人『徒

然草古注釈集成(勉誠社、一九九六年二月)を利用した。
 ・ 句解 — 高階楊順『徒然草句解』。浅香山井『徒然草諸抄大成』に引かれる記事を利用した。

- ・ 文段抄 — 北村季吟『文段抄』。寛文七年の板本を利用した。
- ・ 拾遺抄 — 黒川由純『徒然草拾遺抄』。『未刊国文古註釈大系』第十六卷(清文堂、一九三八年六月)を利用した。
- ・ 諸抄大成 — 浅香山井『徒然草諸抄大成』。貞享五年五月刊の板本を利用した。

- ・ 佐野 — 佐野保太郎『徒然草講義』(福村書店刊、一九三二年)。
- ・ 田辺 — 田辺爵『徒然草諸注集成』(右文書店、一九六二年)。
- ・ 三木 — 三木紀人『徒然草全訳注』(講談社学術文庫、一九七九年九月、一九八二年六月)。

- ・ 久保田 — 久保田淳『徒然草評釈』(注3参照)。
- ・ 稲田 — 稲田利徳『徒然草の虚構性』(注1参照)。
- ・ 筆者 — 以上の注釈書や論文に指摘されていないが、本論文の筆者が『徒然草』の文章と『源氏物語』の文章との間に、共通点が見出されると判断した事例を掲げる。

第四十三段の①「春の暮つたか」と④「庭に散りしほれたる」の風景は、若紫巻の冒頭「三月のつごもりなれば、京の花、盛りはみな過ぎにけり」の部分の雰囲気と類似しているように思われる。②「艶なる空」について、田辺爵氏は『源氏物語』帚木巻の「空の気色も(中略)艶にも凄くも」や藤袴巻の「空の気色も艶なるに」との関

連を指摘されているが、稲田利徳氏は『紫式部日記』の「おおかたの空も艶なるに」をも挙げられ、これは「紫式部の空の描写の特色とみえる」とし、「兼好もはつきりどの場面との意識はないまでも、かかる先行作品の表現に感化されたと思われる」と述べられている。一方、久保田淳氏は『岩波古語辞典』が「艶」の用例として引く蜚卷の「夕闇過ぎて、おぼつかなき空の気色の曇らはしきに、うちしめりたる宮の御けはひも、いと艶なり」及び藤袴卷の「空の気色も艶なるに」をも挙げられている。③「奥深く、木立古りて」については、稲田利徳氏が若紫卷の「荒れたる家の、木立いとものふりて」を挙げられ、「この木立のさまも兼好好みにマッチしている」と述べられているが、四十四段の「心のま、に茂れる秋の野ら」という表現とともに、表に掲げた夕顔卷の某の院や若紫卷の故按察大納言邸の情景描写等にも通っているとも思われる。

四十四段の⑦「竹の編戸」は、和歌にも用例の見える言葉であるが、その典拠は『白氏文集』巻六「閑居」(0258)の「深^ク閉^シ竹^ノ間^ノ扉^ヲ。静^{カニ}掃^フ松^ノ下^ノ地^ヲ。獨^リ嘯^ク晚^ノ風^ノ前^ヲ。何^ノ人^カ知^ラン^ニ此^ノ意^ヲ。」や「香^ニ鑪^ノ峯^ノ下^ニ。新^ニト^シ山^ノ居^ヲ。草^ノ堂^ノ初^メ成^ル。偶^ニ題^ス東^ノ壁^ニ五^ノ首^ヲ」(0975)の「五架三間新新草堂、石桂柱竹編^ム牆^ヲ」と言った詩句に求められるであろう。『源氏物語』須磨巻には後者の白詩を踏まえたと思われる「竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものからめづらしかにをかし」という叙述も存在する。稲田利徳氏は「作者が「竹の編戸」と冒頭に記したとき、それが実在する編戸自体ではなく、「白氏文集」から中世歌人たちが伝統的に受用して

きた、隠遁精神の象徴としてのイメージを描かせていた」と述べられている。また、⑧「さ、やかなる」は帚木巻における空蟬の寝姿の描写「ただ独りいとささやかにて臥したり」とある部分との関連が注意され、四十四段の登場人物が貴公子と童という取り合わせになっていることについても、帚木巻における源氏と空蟬の弟小君という構図との近似が認められる。また、段の後半「山の際にある惣門ある内」の内部の風景描写は、若紫巻において源氏が北山の僧都の僧坊を訪れる場面の叙述と極めてよく似通っている。この四十四段の後半部分と、若紫巻の記事との照応については、『句解』が最初に指摘したのであるが、その見解は現代の注釈書類にも概ね受け継がれているのであって、ほぼ定説化していると言つてよい。

ところで、『徒然草』第四十三、四十四段は、『寿命院抄』が四十四段について「上の段に通ずる也」と述べ、『文段抄』『盤斎抄』等でも両段を分割せずに一連の記事として把握するように、いろいろな意味で対を為しており、緊密な関連を持って結ばれている。四十三段は冒頭に「春の暮つかた、のどかに艶なる空」と大きな空間を提示するが、文章が進むにつれて「家」「庭」「部屋」と次第に小さな空間に分け入って行く。逆に、四十四段では「竹の編戸の内」と狭隘な空間から出発し、やがて語り手の視線は登場人物とともに田中を通り過ぎ、御堂の中に入って行く。さらに、その視線は御堂から庭、庭から再び空へと転じて、言わば四十三段の冒頭部へと回帰するのである。つまり、「空」という大きな拡がりのある空間から屋内の狭く閉ざされた空間へと語り手の視線が徐々に移行する四十三

段の設定に対して、四十四段では、閉ざされた空間から拡がりのある空間へとまったく対照的な場面展開になっているのである。また、四十三段は春、四十四段は秋と、季節の設定も対を為している。その一方で、ここでの詳述は避けるが、両段に描き出された情景には、様々に通い合う要素も見出されるのである。このように四十三・四十四両段の叙述と構想には極めて緊密な対照と連関が設定されているのであり、その四十四段において若紫巻の物語の投影を顕著に認め得るのであるならば、四十三段の文章においてもその受容の可能性が今まで以上に積極的に検討されてよいと考えられるのである。

また、この両段はともに、語り手に相当するある人物の視線に沿って叙述が進み、恰もその視点人物の眼を通して垣間見するような形で、叙述の対象となる家や邸宅の内部の様子が提示され、場面の展開が図られる。垣間見は『源氏』に限らず諸種の王朝物語に広く認められる一種の場面設定の型であるが、若紫巻の物語があまりにも有名な北山の垣間見の場面から語り起こされる事実と、四十三段・四十四段の場面提示の方法の重なり合いは、やはり容易には無視し難いであろう。

このように考えて来ると、兼好が第四十三段、四十四段の文章を執筆するに際して、『源氏物語』の中でも、とりわけ若紫巻の北山の垣間見の場面を一種の粉本として利用していたことは、まず疑いがないかと思われるのである。

二

ところで、第四十四段の舞台として設定されている御堂のある山荘については、近代の一部の注釈書において、藤原公経が建立した北山の西園寺邸との関連が指摘されている。このことを最初に提唱したのは佐野保太郎氏『徒然草講義』であって、「西園寺の様子は増鏡「内野の雪」の巻にあるが、こゝを讀むには、ちやうどよい参考にならうと思う」と述べられているが、その後、田辺爵『徒然草諸注集成』、三木紀人『徒然草訳注』、宮内三二郎『徒然草と増鏡』等にもこの考え方は受け継がれている。

『増鏡』上、第五「内野の雪」の冒頭は次のように記されている。今後の御父は、さきにもきこえつる右大臣夷氏のおとゞ、その父、故公経の太政大臣、そのかみ夢見給へる事ありて、源氏中将わらはやみまじなひ給し北山のほとりに、世に知らずゆ、しき御堂を建てて、名をば西園寺といふめり。この所は、伯三位資仲の領なりしを、尾張国松枝といふ庄にかへ給てけり。もと
は、田畠など多くて、ひたぶるに中めきたりしを、さらにうち返しくづして、艶ある園を造りなし、山のた、ずまる木深く、池の心ゆたかに、わたつうみをた、へ、峯よりおつる瀧のひきも、げに涙もよほしぬべく、心ばせ深きところのさまなり。本堂は西園寺(中略)成就心院といふは愛染王の座さまさぬ秘法とり行なはせらる。(中略)北の寝殿にぞ大臣は住み給。めぐれる山るときは木ども、いと旧りたるに、なつかしきほどの若

木の桜など植へわたすとて、大臣うそぶき給ける。

山ざくら峯にも尾にも植ゑおかんみぬ世の春を人や忍と

かの法成寺をのみこそ、いみじきために世継もいひためれど、これはなを山の気色さへおもしろく、都はなれて眺望そひたれば、いはんかたなくめでたし。⁶⁾

「内野の雪」は、後嵯峨・後深草の二代、仁治三年（一二四二）から建長七年（一二五五）まで十四年間の出来事を中心に記している。西園寺は、元仁元年（一二二四）西園寺公経が家領の尾張国松枝荘と交換した資仲王の領地に築造した寺院を指しているが、四条天皇をはじめ歴代の天皇、上皇、女院の行幸御幸があり、仏事や音楽、月見の宴等が行なわれていた。

この『増鏡』に記された北山西園寺のたたずまいと『徒然草』四十四段の後半部分に設定された山荘の描写との間には、以下のような共通する要素を見出すことが可能である。西園寺は衣笠山の北西、現在の金閣寺の地に建立されたが、『増鏡』に扱ればその地は「もとは、田畠など多くて、ひたぶるに中めきたりし」という有様であり、それを「さらにうち返しくづして」造営されたと言う。また、その立地については、「都はなれて眺望そひたれば、いはんかたなくめでたし」と述べられている。これに対して『徒然草』四十四段では、童ひとりを連れた貴公子が「遙かなる田の中の細道を、稲葉の露にそぼちつ、分け行ほど」に「山の際にある惣門ある内に」入り、「宮こよりは目とまる心ちして」「宮この空よりは雲の行来も速

き心ちして」という叙述も見えるのである。京都郊外の山懐で田園地帯の奥に位置するという立地において、北山殿と『徒然草』四十四段の舞台は明らかに一致する。また、その敷地内に寝殿と御堂とともに備えるという点においても、両者はぴったりと重なり合うのである。

さらに、『徒然草』四十四段に描き出される某所は、皇族を迎えて仏事を執り行うことが可能であり、女房たちが行き通う様から考えても、相当の地位の人が営む規模の大きな邸宅であることが想像されるが、西園寺もまた有力権門の別業として、しばしば大規模な儀式、仏事の舞台となっていたのであって、その面においても条件をよく満たしている。例えば、弘安八年（一二八五）三月三十日には、北山の准后と称された藤原貞子の九十の賀宴が北山殿で三日に亘って開催された。貞子は西園寺公経の嫡男実氏の妻であり、後嵯峨天皇の皇后大宮院姑子の母でもある。このような縁から西園寺邸で賀宴が営まれたのであるが、その盛儀の様は『とはずがたり』に微細に記し留められている。また、日野名子の回想の記である『竹むきが記』にも、北山第についての詳細な記述がある。名子（生年未詳、一三三八）は持明院統廷臣の日野資名の女で、南北朝時代、後伏見・光厳天皇に仕え、のち西園寺公宗の室となった。しかし、夫の公宗は新政に謀叛を企てた罪により、名子の眼前で斬首され、その後、名子は一子実俊を産し、後醍醐方の探索の眼を逃れて養育した（『太平記』卷十三「北山殿謀叛事」）。建武四年（一三三七）実俊は三歳で叙爵し、以後西園寺家正統回復に努め、暦応三年（一三四

○名子は実俊と共に北山西園寺本第に移住したのである。当時北山第では、実俊元服の儀をはじめ、光嚴院の御幸、公宗十三回忌、公衡の三十三回忌等の儀式や御幸、法事等が行われていた。その北山第について名子は次のように讚美している。

さるは折につけたる興遊も、世にありがたき住ひにぞありける。代々の君の皇居　として、深き匠の心をあらはせる様、旧りぬる今もなを珍し。峰にも尾にもと代々に植へ置かれける木ずゑども、枝を交はせる花の軒、庵を並べつゝ、妙なる砌ことさらに情あり。苔の緑の木の本には、花の筵心をのぶる色ことに見ゆ。山の紅葉の深き色に、心を染めぬ人なし。枕に近く聞き馴る、峰の小鹿の妻恋は、涙もよほす寢覚の床あらば、あはれ浅からざらんかし。折につけつゝ、花にあり葉にある色、月雪の眺め、すべて世に知らぬ情、求めざるに自からあり。岩木の姿つくろはぬ己がた、ずまひしも、中／＼珍し。岩間をくゞる清水は代々にすみける流れ絶えず、結ぶ手の雫に濁る恨だになし。事にふれつゝ、憂世を忘るゝ、つまにぞ侍べき。所／＼に建て置かれ侍御堂は、家門繁昌の為のみならず、勅願寺にて天下の御祈禱、他に異ならぬ御願にて侍れば、代々これを大事と沙汰侍れど、諸堂数多く御願事繁ければ、聊ずる事も侍らめども、大方は怠らぬさまなり。殊に成就心院は座をさまさぬ不断の勤め（中略）

三位中将、釣殿より参給て西の座に付く。山の気色、心許なき秋の色しも、見所あるさま也。階の下の尾花の打靡きつゝ、岩

間をぐゞる水の流れなど、いとおかしう見ゆ。西面の格子の上げわたしたるに、池の鏡も曇りなく見えつゝ、傾く日影には仏の御光いとゞしく磨かれつゝ、袖をひる返し給菩薩の影向も、まことに眼の前に輝けりと見ゆ。(後略)（『竹むきが記』下）

この記事は、康永元年（一三四二）頃のものとして推定されているが、『徒然草』の成立に比較的近い時点での西園寺がまだほば昔の面影を保ったまま存在していたことは窺われよう。

このように『増鏡』に記された北山殿西園寺の面影と『徒然草』四十四段の記事との間には、少なからぬ共通点が見出されるのであって、四十四段の舞台を西園寺に比定する考え方には相応の根拠が認められるかに思われる。但し、『増鏡』は著者、成立ともに未詳であるが、応安年間（一三六八—一三七五）から永和二年（一三七六）にかけての成立とみる説が有力であり、『徒然草』の成立（一三三〇—一三三三）¹⁰より少し下っている故、『徒然草』四十四段の記事が『増鏡』「内野の雪」巻を踏まえて書かれたとは考え難い。また、四十四段の文章において、西園寺の名前が直接に挙げられているわけではない。したがって、如上の西園寺モデル説については、現状では飽くまでも推測の域に止まると判断するしかないが、前節に述べた如く、四十四段の文章に『源氏物語』若紫巻の投影が色濃く認められるという事実を視野に入れるならば、『徒然草』第四十四段と西園寺との関係に新たな補助線を加えることが可能であるかと思われる。

『増鏡』「内野の雪」巻の西園寺建立の記事と『源氏物語』若紫巻との関係については、今西祐一郎氏に詳密な論がある。本節では、「若紫巻の背景——北山」考(一)——と「公季と公経——北山」考(二)——と題する今西氏の二編の論文を踏まえて考察を進め、『徒然草』第四十四段と『源氏物語』の世界との関わりについてさらに検討を加えたい。

先にも掲げたが、公経の西園寺建立の経緯を語る『増鏡』「内野の雪」巻の記事は、若紫巻の物語と密接な関わりを有する。

瘡病にわづらひたまひて、よろづにまじなひ、加持などまゐらせたまへど、しるしなくて、あまたたびおこりたまひければ、ある人、「北山になむ、なにがし寺といふ所に、かしこき行ひ人はべる。去年の夏も世におこりて、人々まじなにわづらひしを、やがてとどむるたぐひあまたはべりき。ししこらかしつる時はうたてはべるを、疾くこそころみさせたまはめ」など聞こゆれば、召しに遣はしたるに(後略) (『源氏物語』若紫巻)

若紫巻の物語は、わらわ病みに悩んでいた源氏が加持を受けるため、北山のなにがし寺に赴くというところから語り出される。今西氏は、『増鏡』の西園寺建立の記事の中に若紫巻の北山の僧都の僧坊の描写を踏まえたと思しき記事があることを以下のように指摘されている。

① 峯よりおつる瀧のひっきも、げに涙もよほしぬべく、心ばせ深

きところのさまなり

(増鏡)

吹き迷ふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな

(若紫巻)

② なつかしきほどの若木の桜なんど植へわたすとて

山ざくら峯にも尾にも植ゑおかんみぬ世の春を人や忍と

(増鏡)

やや深う入る所なりけり。三月のつごもりなれば、京の花、さかりはみな過ぎにけり。山の桜はまださかりにて、入りもておはするままに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば

(後略)

(若紫巻)

『増鏡』の記事の冒頭では、「源氏中将わらはやみまじなひ給し北山のほとりに」と、公経の西園寺建立が『源氏物語』若紫巻の叙述を念頭に置いてのことであったことが語られている。今西氏は、「公経が自邸を光源氏が「わらわやみ」の治療に出かけた「北山」の「なにがし寺」を見たと、その意匠をそっくりとりこんで北山殿を造営しようという夢が懐かれていたはず」と述べられているが、『増鏡』の作者も同様の認識を抱いていたことを、右の①、②の記事から窺うことが可能である。殊に注目すべきは、①の記事中の「げに」である。この「げに」は、明らかに若紫巻の光源氏詠「吹き迷ふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな」の第四句「涙もよほす」を受けて用いられているのである。また、②の記事中に引かれる公経の歌は『新勅撰集』(巻十六、雑、一〇四二)に入集するが、『新勅撰集』では「西園寺にて三十首歌よみ侍りける春歌」という詞書

が付されている。この公経の歌に言う「見ぬ世の春」について今西氏は、「公経自身をも含めてこの世の誰もが見たことのない、『源氏物語』若紫巻の北山の春の謂いではなかったか」と説かれている。

『増鏡』の叙述を受けて今西氏が詳説される如く、公経の北山殿造営が『源氏物語』若紫巻の物語を強く意識した上での事業であったことは確実であろう。

それでは、別業の造営を目論む公経の目を若紫巻の物語に向けさせた要因は、一体何であったのだろうか。今西氏はそれを、『異本紫明抄』^[12]が引く『宇治大納言物語』の藤原公季わらわ病み説話に求めている。

- ① 閑院太政大臣三位中将之時童病におもくわづらひ給ければ、まいらねば、かれにかぢをさせんとておはするに、みちよりおこり給ぬ。寺ちかふなりければ、これよりかへるべきにあらずとて、かれにおはして坊の軒まで車をよせて、案内をいはせ給へば、ちかごろひるをたべて候といふ。さりとともたゞ上人を見たまつらむ、いまは見かへらじとありければ、さらばいらせ給へとて、坊のしとみのもとりのけて、あたらしき筵しきていらせ給べきよしを申たれば、人にかゝりて入給ぬ。持経者水あみてとばかりありて、たけたかやかなる僧のやせたるぞいできたる。見るにいとたうとし。申やう、風のおもく候へばくすしの申にしたがひて、ひるをたべて候也。されどかくおはしまして候へば、いかでかはとてまいる候なり。法華経は浄不浄

らせ給べき経にもおはしませねば、誦たてまつらむに何条事かは候はむとて、すゞをおしもみてよりける程に、いとたのもしわかくびにてをへてひぎを枕にせさせたてまつりて、葷量品をうちあげてよむこゑ、いとわかく貴事もありけるはとおぼゆ。

③ しはがれたるこゑのくうつきて、あはれなる事かぎりなし。持経者の目より涙をはらはらとおとしてするま、になくことかぎりなし。この涙ほとをりふしたるむねにひやうかにてかゝる。それよりひへひろごりて、うちふるひくし給て、二反許おしかへし誦するほどにさめ給ぬ。心ちいとあざやかに、なごりなくおこりはて給ぬれば、返々のちの世まで契て帰給ぬ。

今西氏は右の記事中に若紫巻によく似た要素が三つあると述べられている。その第一は、傍線①の「童病」を患う主人公が「三位中将」であるという点、第二は、傍線②の洛外に住む験者の評判を聞き、召したけれども、病を理由に参上しないので、主人公自らが加持のために洛外に赴くという点、第三は、傍線③の部分、主人公を加持する験者の描写が、若紫巻における北山の聖の描写「聖、動きもえせねど、とかうして護身まるらせ給ふ。かれたる声のいといたうすきひがめるもあはれに功つきて、陀羅尼読みたり」に類似するという点である。

藤原公季は、右大臣師輔の末子として天徳元年(九五七)に生まれ、世に閑院太政大臣と呼ばれた人物である。その母は醍醐天皇皇女康子内親王であったが、公季の誕生直後に没し、父師輔をも四歳の時に失って、以後姉の村上天皇中宮安子に養育された。公季が「三

位中将」であったのは天元四年（九八一）から永観元年（九八三）の任参議までの期間であるが、それはおそらく紫式部が十歳前後であった時期に相当する。¹³今西氏は、「やがて説話集に書き留められることになる三位中将公季の「わらはやみ」譚の発生がこの時点に求められるとすれば、その十数年後に『源氏物語』の筆を執る紫式部は、おそらくこの「わらはやみ」譚生成の現場に居合わせたといつてもよい」と述べられているが、若紫巻の発端を為す光源氏の北山行の重要な準拠として公季わらわ病み説話を看過することはできないと考える。

しかしながら、唯一気になるのは、『異本紫明抄』所引の『宇治大納言物語』では公季が療治に出かけた先が、「北山」ではなく「東山」になっている点である。この場所の食い違いの問題に関しては、ほぼ同話を取める『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の記事が参照される。

今昔、京ノ西ニ①神明ト云フ山寺有リ。其二睿実ト云フ僧住ケリ。（中略）而ル間、②閑院ノ太政大臣ト申ス人御ケリ。名ヲバ公季ト申ス。九条殿ノ十二郎ノ御子也。母ハ延喜ノ天皇ノ御子ニ御ス。其ノ人、其ノ時ニ、若クシテ三位ノ中将ト聞エケルニ、夏比瘧病ト云フ事ヲ重ク悩ミ給ヒケレバ、所々ノ靈験所ニ籠テ、止事無キ僧共ヲ以テ加持スト云ヘドモ、露其ノ験無シ。然レバ、此ノ睿実止事無キ法花ノ持者也ト聞エ有テ、其ノ人ニ令祈ムト思テ、神明ニ行キ給フニ、例ヨリモ疾ク③賀耶河ノ程ニテ、其ノ氣付ヌ。「神明ハ近ク成ニタレバ、此レヨリ可返キニ非ズ」ト

テ神明ニ御シ付ヌ。房ノ檐マデ車ヲ曳寄テ、先ヅ其ノ由ヲ云ヒ入サス。持経者ノ云ヒ出ス様、「極テ風ノ病ノ重ク候ヘバ、近来蒜ヲ食テナム」ト。而ルニ、「只聖人ヲ礼ミ奉ラム。只今ハ可返キ様無」ト有レバ、「然ラバ、入ラセ給ヘ」トテ、部ノ本ノ立タルヲ取去テ、新キ上筵ヲ敷テ可入給キ由ヲ申ス。¹⁴（後略）

（『今昔物語集』卷十二第三十五話 神名睿実持経者語）
むかし②閑院大臣殿、三位中将におはしける時、わらはやみを、おもくわづらひ給けるが、「①神名といふ所に、叡実といふ持経者なん、童やみはよく祈おとし給ふ」と申人ありければ、「此持経者にいのらせん」とて行給に、③荒見川の程にてはやうおこり給ぬ。寺はちかくなりければ、これより帰べきやうなしとて、念じて神名におはして、坊の簷に車をよせて、案内をいひ入給に、「近比蒜を食侍り」と申。しかれども、「たゞ上人をみ奉らん。只今まかり帰ことかなひ侍らじ」とありければ、「さらばはや入給へ」とて、坊の部、下立たるをとりて、あたらしき筵敷て「いり給へ」と申ければ、いり給ぬ。¹⁵（後略）

（『宇治拾遺物語』卷十二第五話 持経者叡実効験の事）
『今昔物語集』『宇治拾遺物語』においては、公季に加持を施した人物は「神明（名）」にいた叡実という持経者であり、公季はその「神明（名）」に赴いたと語られる。叡実は『小右記』『法華験記』にもその名に見える実在の人物であるが、この両書においても「神明（名）寺」の僧として記されている。「神明（名）」の所在比定の問題についてはすべて今西氏の考証に譲るが、紙屋川上流域の西岸、つまり

北山第が営まれた地域に重なりと判断される。言い換えるならば、若紫巻発端の物語の準拠となった公季わらわ病み説話の舞台である北山神明（名）の地に、公経は西園寺を建立したと推察されるのである。

わらわ病み説話以外にも、公季の閔歴と光源氏のそれとの間には、共通する要素を少なからず見出すことが可能である。先にも述べたが、幼くして父母を失った公季は姉の村上天皇中宮安子に養育され、皇子に等しい扱いを受けた。このような公季の幼年時代は、母更衣に死なれたあと、父帝の寵愛を一身に集めた桐壺巻における光源氏の幼少時の設定を髣髴させる。そして、両者ともに若くして一条朝以前には異例の「三位中将」であったという点も一致している¹⁸。今西氏は、公季の西園寺建立を「閔院流の祖公季の顕彰、ひいてはみずからをも含めた閔院一門の顕彰という一面を強くもった行動」であったと説かれている。換言するならば、公経の北山殿建設の背景には、我が一門の祖公季の事蹟を光源氏像の有力な準拠として位置付け、その公季ゆかりの地に若紫巻の「北山のなにがし寺」を再現する意図が働いたと推認されるのである。

四

以上、主として今西祐一郎氏の考説に沿う形で、藤原公経の西園寺建立が『源氏物語』若紫巻の世界といかに深く関わった事業であったかということ概観して来たが、『増鏡』の作者も無論、光源氏

の北山行の準拠としての「公季わらわ病み説話」の存在をよく承知した上で、「源氏中将わらはやみまじなひ給し北山のほとり」に公経が別業を構えたと書き記したのであろう。他方、本論文の冒頭でも触れたが、『徒然草』の中には『源氏物語』中の難義として名高い「揚名介」を巡る記事（百九十八段）や、源氏学者として知られる丹波忠守を一方の主役とする逸話（百三段）等が記し留められている。

また、「八月十五日、九月十三日は、婁宿なり」という二百三十九段の行文が、河内方源氏の注釈書として著名な『原中最秘抄』の記事に一致することも指摘されている¹⁹。『源氏物語』に対する兼好の知識と関心は、これら中世前期の注釈家たちのそれと重なり合う性質のものであったことが窺われるのであって、おそらくは若紫巻発端の物語の源泉となった「公季わらは病み説話」についても、『異本紫明抄』の著者と同様の理解を持っていたと推量して差し支えないであろうし、そうであるならば、北山殿造営の背後に潜められていた公経の意図についても、これを察知していた可能性が高いと判断されるのである。

かかる事情を勘案するならば、『徒然草』四十四段の後半部に設営された山荘のモデルとして北山の西園寺殿が想定されていたのではないかという説にはいっそうの蓋然性を認め得るのであり、西園寺を念頭に置いて執筆することによって、四十四段及びそれと一対を為す四十三段の文章の随所に、『源氏物語』とりわけ若紫巻の叙述が色濃く投影される結果がもたらされたのは言わば必然であったと思量されるのである。

最後に、やや蛇足ながら、西園寺家の人々に対する兼好の関心のあり方について確認して置きたい。『徒然草』にその名の見える人物を家筋ごとに数え上げて行くと、西園寺家及びその庶流の洞院家に属する人々が相当の多数を占める。三十三段(玄輝門院)、四十五段(公世)²⁰、六十二段(延政門院)、七十段(兼季)、八十三段(公衡)、九十四段(実氏)、百二段(公賢)、百七段(実雄)、百十四段(公相)、百十八段(実兼・中宮禰子)、百五十二段(実衡)、二百二十二段(東二条院)、二百三十一段(実兼)、二百三十八段(顯助僧正)等計十四段にのべ十五名を数える。これは、在俗時の兼好が近仕していたと推測される村上源氏久我流の人々に匹敵し、西園寺家と並ぶ閑院流の有力な一門である三条家や徳大寺家の人々を遥かに上回る数である。²¹

また、兼好の歌の師二条為世に、「昭訓門院春日(局)」と呼ばれた一女があり、西園寺実衡に嫁して延慶三年(一一三一〇)に一子公宗を生んだ。つまり『竹むきが記』の筆者の姑に当たり、『続千載集』以下に計三十八首が入集する勅撰歌人でもある。また、彼女が仕えた昭訓門院は西園寺実兼の女である。兼好と西園寺家を結ぶ人脈の一つを、兼好——二条為世・為定——昭訓門院春日——西園寺家という線で想定することも可能であろう。²²

鎌倉時代の西園寺家は、公経以来代々の当主が関東申次を歴任し、朝廷の要職を占めて摂関家をも凌ぐ権勢を誇った。したがって、『徒

然草』の中に西園寺家の人々の名前がしばしば登場するのは、そのような時代状況を反映した極く自然な事態であると理解されてもよいのかもしれないが、四十四段の舞台設定の背後に、兼好がこの一門の人々に注ぐ積極的な関心が潜んでいたと考えることも、また、強ちな付会であるとばかりは言い切れないであろう。

おわりに

本論文では、『徒然草』四十四段後半部の舞台設定が、『増鏡』にも語られている北山殿西園寺のたたずまいを念頭に置いて為されているのではないかと、佐野保太郎氏以下の指摘に着目し、公経の西園寺造営の意義を綿密に探る今西祐一郎氏の御論に導かれる形で、『源氏物語』若紫巻の世界と『徒然草』第四十三段・四十四段との関わりについて、再検討を試みた。公経による西園寺建立が若紫巻冒頭の光源氏の北山行を強く意識しての所為であったことを兼好はおそらくよく承知した上で、四十四段後半部の舞台をひそかに西園寺に擬え、若紫巻をはじめとする『源氏物語』の文章を随所に鏤めつつ、四十三・四十四両段の場面と叙述を構想して行ったというのが、本稿筆者の推論である。

注

(1) 『国語と国文学』(一九七六年六月号)。

(2) 『徒然草』の本文は、正徹本を底本とする久保田淳校注の『方丈記・

- 徒然草』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九八九年一月)に拠った。同書では正徹本の欠字、欠文を他本によって補った箇所には「」が付されているが、その「」はそのままだ付した。
- (3) 久保田淳『徒然草評釈』(『国文学解釈と教材の研究』、学燈社、一九八八年二、三月号)。
- (4) 『白氏文集』の本文、詩番号は那波本を底本とする平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』(同朋舎、一九八九年十月)に拠った。白詩の訓読文については、佐久節『白樂天全詩集』全四卷(一九二八年八月〜一九三〇年八月、本稿では日本図書センターの復刻本を利用した)と、新釈漢文体系『白氏文集』三、四(明治書院、一九八八年七月、一九九〇年十一月)を参照して付した。
- (5) 『文学』(一九七三年十一月号)。
- (6) 『増鏡』の本文の引用は、日本古典文学大系『神皇正統記・増鏡』(岩波書店、一九六五年二月)に拠った。
- (7) 『竹むきが記』の本文の引用は、新日本古典文学大系『中世日記紀行集』(岩波書店、一九九〇年十月)に拠った。
- (8) 注(7)参照。
- (9) 『日本古典文学大辞典』(岩波書店、一九八三年十月〜一九八五年二月)。
- (10) 『徒然草』の成立については、元徳二年(一三三〇)の末から翌元弘元年(一三三二)秋にかけてのある期間に執筆されたとする橋純一説に従った。
- (11) 今西祐一郎『源氏物語覚書』(岩波書店、一九九八年七月)。
- (12) 『異本紫明抄』の本文の引用は、ノートルダム清心女子大学古典叢書(福武書店、一九七六年七月)に拠った。
- (13) 紫式部の生年については諸説あるが、概ね天延元年(九七三)前後の数年の幅に収まる。
- (14) 『今昔物語集』の本文は、新編日本古典文学全集『今昔物語集』(小学館、一九九六年七月)に拠った。
- (15) 『宇治拾遺物語』の本文は、新編日本古典文学全集『宇治拾遺物語』(小学館、一九九九年四月)に拠った。
- (16) 「傳聞、一昨夜左近少将惟章・右近将監遠理密到神名寺、以叡実令剃頭、即到愛太子白雲寺云々」(『小右記』天元五年六月三日の条)。「小右記」の本文の引用は、大日本古記録に拠った。
- (17) 『法華験記』中巻第六十六話の標題に「神明寺の叡実法師」という記事が見える。
- (18) 神野志隆光(三位中将)と『源氏物語』(山中裕編『平安時代の歴史と文学』文学編、吉川弘文館、一九八一年十一月)に拠った。
- (19) 新日本古典文学大系『方丈記・徒然草』の脚注に引かれる落合博志氏の指摘による。『国文学解釈と教材の研究』一九八九年三月号を参照。
- (20) 公世は閑院流三条家の流れをくむ八条家の人であるが、『尊卑分脈』に「公世」為実雄公子」とあるので洞院家の人として数え上げた。
- (21) 村上源氏久我流の人々は計十二段にのべ十三名を数え、三条家や徳大寺家の人々は両家合わせて計六段にのべ九名が登場する。
- (22) 宮内三三郎『とはすがたり・徒然草・増鏡新見』(明治書院、一九七七年八月)参照。